

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2011/02 第52号

エッセイ ホタルと私⑦-

歌の中に

日本ホタルの会 理事 井上 務

2009年3月、環境に関する研修会に参加するため。法政大学（市ヶ谷キャンパス）を訪問する機会がありました。開会までの短時間でしたが、会場で頂いた小冊子を何気なくめくっていると巻末に法政大学の校歌（作詞；佐藤春夫、作曲；近衛秀麿）が載っていました。歌詞を目で追っていた私はその中に「蛍」という文字を見付け「おっ！ここで蛍に出会うとは！」とビックリしました。法政大の卒業生でない私でも知っている「♪法政 おお 我が母校、法政 おお 我が母校♪」との歌詞のちょっと前に「蛍集めむ門の外濠」というフレーズを見つけたのです。寡聞にしてこのフレーズを知らなかった私は新たな発見をしたような嬉しい気分になりました。研修会冒頭でご挨拶に立たれた総長のスピーチにも、特別講演をご担当された法政大教授のお話しの中にも「蛍」が登場しました。そこで「蛍集めむ門の外濠」と

の歌詞がとても気になりましたので会合終了後、法政大の先生に「昔、本当にこの周辺でホタルが舞っていたのでしょうか？」と質問してみました。すると「私には分かりません、歌の中だけのことかもしれませんネ」との回答でした。私は「しかし、もしここ市ヶ谷周辺でホタルが舞ったら素晴らしいことですネ」とご返事いたしました。

そんな発見がありましたので頂戴した他の小冊子を丹念に読み始めると法政大学の多摩キャンパスではホタルが復活しつつあることが分かってきました。小冊子には「多摩キャンパスにホタルを復活させ隊」というチームが活動し、2007年6月3日には約20個体の明滅が確認されたとありました。更に、自生を目指したいと文は結ばれておりました。その冊子を手に、ホタル自生の実現を大いに期待しました。



(写真1) いまだ多くの自然に囲まれている法政大学多摩キャンパス

さて、法政大学市ヶ谷キャンパス訪問から数ヶ月後、法政大のT氏よりご連絡を頂く機会がありました。内容は「多摩キャンパスの調整池で飛翔しているゲンジボタルが西日本型であることが判明したので、今後の取り組みについて助言して欲しい」というものでした。以前、当会小俣理事に法政大多摩キャンパスをご案内いただいたことがありましたがだいぶ時間が経過していましたので改めて多摩キャンパス現地を訪ることにしました。当日はT氏をはじめ学生さん、ご担当の先生に同行して頂きました。現地見学、意見交換の中で、法政大学さんと同様の問題に直面し「東京ホタル会議」との連携で西日本型から関東型ホタルへの転換を実施した創価大の取り組みを参考例として紹介いたしまし

た。その経緯が昨年「法政大学環境報告2009-10 グリーンユニバーシティをめざして」の7ページ目に「多摩キャンパスホタル復活の取り組み」とのコーナーで紹介されておりました(写真2)。文面から、まだ模索中であることが読みとれますのがホタル復活へのポテンシャルはかなり高いと私は判断いたしました。多摩キャンパスとともにいつか法政大市ヶ谷キャンパス至近の外濠でホタルが舞うことを願いました。そのためには先ずは多摩キャンパスで関東型ホタルが乱舞する日が来ることを祈りました。そして、お手伝いできることがあれば微力ですが協力させていただきたいと考えました。

ところで、歴史が長い学校の校歌を調べると校歌が作られた当時の学校周辺

多摩キャンパスホタル復活の取り組み

の調整池で行っているホタル復活の取り組み。ゲンジボタルが西日本型遺伝子を持つことが分かり、活動の方向性を模索します。今後の方針を早急に策定すること

の「ホタルのタベ」にご招待いただけるホタル飼育活動を実際に見学。また、東京でホタルの保護活動「ホタル会議」を紹介していただけます。

(写真2) 「多摩キャンパスホタル復活の取り組み」

の自然環境が推測できるといわれます。「螢集めむ門の外濠」と歌う法政大は創立130年。1931年に現在の校歌ができたとのことですから作詞は80年以上前のことになります。もしかすると当時は外濠にゲンジやヘイケボタルが舞っていたのかもしれません。陸生ボタルが明滅していた可能性も否定できないのではないでしょうか？

因みに、3年前に100周年を迎えた我が母校（高校）の校歌は「湧水は 街を巡り」で始まります。私が高校生だった約40年前、豊かな湧水が学校（京王八王子駅近く）の周辺を流れておりました。地域の先輩方に聞くと、その昔、学校の周辺ではホタルも舞っていたようです。しかし今、校歌に歌われた美しい流れを目にする事はできません。街を巡っていたあの豊かな湧水は、人の目に触れることなく暗渠の中を流れているようです。もちろんホタルの姿はありません。

例えば100年後、もしもこのニュースレターを目にする方がいたとするな

らば・・・。「あら、今ではお濠のどこにだってホタルがフツーに舞っているのにネ」と反応しているのでしょうか？それとも「昔も東京の区部にホタルを取り戻そうとしていた人達がいたけれどまだお濠にホタルはいないネ」となっているのでしょうか？私たち「日本ホタルの会」の使命は大きいナ！と感じます。

今、都会のアチコチにはホタルの代わりにたくさんの LED 電飾が明滅しています。「歌う」には「訴う」の意味もあるそうですが、法政大校歌に触発され、ホタルを歌った古い時代の歌が今を生きる私達に何かを訴えているように感じ拙文を綴ってみました。

(いのうえ つとむ)

創価大学職員・螢桜保存会の顧問を長年務める。

東京ホタル会議・日本ホタルの会理事

創価大学

螢 桜 保 存 会 の 挑 戦

城 尾 弘 美



(写真1) 羽化したヘイケボタル

豊かな自然が多く残っている八王子の地に創価大学はあります。その構内にある水路が私たち螢桜保存会の主な活動場所です。私たちは育てた螢の幼虫をその水路に放流し、成虫になるまでの手助けをする活動をしています。もともと大学内に流れる小川には多くの螢がいましたが、大学の設備が拡充したことが原因なのか、螢の数は減少し、やがて見られなくなってしまいました。そんな中「創価大学に螢を呼び戻したい」と考えた学生が集まり出来たのが螢保存会です。そして後に桜保存会と合体し、今の螢桜保存会となりました。今年で我が部は31周年を迎えます。長年の先輩方の苦労のおかげで、水路は再び多くの螢の光を見ることができる環境にまで回復しました。

私たちは部の草創期からゲンジボタルとヘイケボタルの飼育を行ってきました。その中でゲンジボタルは遺伝子に地域差があり、私たちが飼育してきたゲンジボタルが西日本型であることがわかりました。地域固有種の保存の重要性が大きく取り上げられるようになっていましたこともあり、議論の末、西日本型ゲ

ンジボタルの野外飼育を中止することにしました（室内では西日本型の飼育を続けていましたが、残念ながら絶えてしましました）。それから、水路で自生していた西日本型ゲンジボタルの自然発生が数年間にわたって確認できなくなりました後、平成14年と平成18年の2回にわたり関東型の遺伝子をもつゲンジボタルを導入しました。それは、今まで先輩方が積み重ねてきたことを白紙に戻すようなものでした。しかし関東で西日本型螢を育てると、その地域の固有種が失われる危険性があります。そこで螢が飛んでいた元の環境を取り戻すには、関東型でなければならないと私たちは考えました。また、私たち螢桜保存会には、大学の創立者から頂いた「創大を日本一のホタルの名所に」という指針があります。“日本一のホタルの名所”について皆で研鑽した末に、それは多摩地域固有の螢が乱舞する場所であるという考えに至り、困難でも関東型ゲンジボタルに移行するという大きな決断をしたのでした。

移行してから数年間、関東型のゲンジボタルの成虫を見ることはできませんでした。新しい環境に慣れないせいだと思っていましたが、お世話になっている東京ホタル会議の方々に教えて頂く中で、1年で大半が成虫になる西日本型ゲンジボタルと異なり、関東型のゲンジボタルは2～3年掛るものもいることがわかりました。それから関東型ゲンジボタルに対応するため、飼育方法を工夫していきました。試行錯誤した結果、2年前初めて2匹の関東型ゲンジボタルの羽化に成功することができました。そして、去年には約10匹の関東型ゲンジボタルの飛翔が確認でき、風格さえ感じられるそのゆっくりとした大きな光に感動し、泣いて仲間と喜んだことを覚えています。関東型に移行してほぼ9年。勝負はここからです。地道な作業の繰り返しありませんが、たくさんの蛍が創価大学で美しく光り舞う姿を思い描いたら、また、自分たちの活動が次に続く

後輩たちの礎になると考えたら努力や悩みも、喜びの一つと思えてきます。



(写真3) 地道な飼育活動

自分たちが育てた蛍の光を見て喜んで下さる方々がいることが、何よりも私たちの支えになっています。蛍の季節には学内で観賞会を開き、毎年地域の方々が見に来て下さいます。特に小さなものの中には蛍を見たことがないという子が多く、初めて見る、美しく舞う蛍の光に驚き喜んでくれます。蛍の季節以外は、幼虫の飼育、水路の整備、カワニナの世話など、地道な活動をしています。



(写真2) 人工的な上陸装置に上陸する幼虫

しかし、それだけでなく八王子環境フェスティバルや NHK が主催する環境イベント、学内で行う環境シンポジウムや大学祭などで、蛍を通して環境保護の啓蒙活動をしています。私たちの活動の使命は蛍を飛ばすことだけではありません。蛍はたった 2 週間という短い時間の中で生命を燃やすように光っています。その蛍の一生懸命生きる姿に学ぶことはたくさんあります。そうした蛍の光を通して、多くの人に自然の美しさ、生命の尊さを伝え、自ら「自然を守りたい」

「自分から行動していこう」という環境意識の「変革」を促すことが私たちの大目的であると思っています。また、蛍の光は平和の象徴とも言われています。私たちの大学の創立者は、「蛍が飛ぶところは、自然が豊かであるだけではなく、そこに住む人々の心が豊かな場所である。」と言われています。そのことから、蛍が飛ぶところに平和が生まれると信じ、自分たちの活動に誇りを持って行動しています。

螢桜保存会を卒業した先輩方は全国にいます。ある先輩は「身近な地元の環



(写真 4) ほたるの幼虫に興味津々な子供達

境から守りたい」と市の環境部の職員に、またある先輩は「子どもたちに自然の大切さを教えたい」と教師に…。先輩方は蛍から学んだことを活かし、それぞれの場所で活躍されています。

長年、螢桜保存会を支えて下さった顧問も引退され、昨年から新しい顧問と共に活動しています。私たちがここまで発展できたのも、ずっと部を支えて下さった大学の創立者と前顧問、また「東京ホタル会議」「日本ホタルの会」の方々、そして各イベントでお世話になっている方々のおかげです。心から感謝申し上げます。これからもこの感謝の思いを忘れず、螢桜保存会は蛍の生き方に学び、たくさん的人に蛍の生命の光を届けられるよう、これからも頑張って参ります。皆様、ご指導の程、宜しくお願ひ致します。

(じょうお ひろみ)

「螢桜保存会」では、毎年 6 月中旬頃に鑑賞会「ほたるの夕べ」を開催し、毎回多くの方に来場いただいています。ほたるの観察だけでなく、展示をはじめ、大学クラブの演奏や演技もお楽しみいただくことができます。

開催情報などは、ホームページにてご確認ください。

<http://keiofirefly.huuryuu.com/>

2009 年度日本ホタルの会業務報告

日本ホタルの会の活動状況について、次のとおり、報告します。

1. 会の体制

(1) 会員数

2009 年度期首及び期末の会員数は次のとおりとなっています。

年 度	法人会員	公的会員	個人会員	計
2008 年度末	0	6	163	169
2009 年度末	0	6	162	168

公的会員に変化がありませんが、法人会員登録はありませんでした。また、個人会員は横ばい状態です。公的法人会員の減少を抑え、法人会員の増加を図るため、会則を改正し 2010 年度から法人会員等の会費を値下げしました。

(2) 役員体制

2009 年度の役員は次のとおりです。

名譽会長 矢島稔

会 長 本多和彦

副会長 鈴木浩文

理 事 小西正泰、川村善治、荻野昭、小俣軍平、常喜豊、井上久彌、井上務、古河義仁、渋江桂子、宇田川弘康

会 計 井上久彌

監 査 井上務、後藤洋一

事 務 局

事務局長 井上久彌

井上務、古河義仁、渋江桂子、宇田川弘康、後藤洋一、立田美枝子

事務局業務は、事務局に会長と副会長を加えた体制で進めています。

2. 財政及び運営

(1) 財政

日本ホタルの会は、会員の皆様の会費によって運営されています。2009 年度の会費収入は、477,000 円となっています。一方、2009 年度支出は、434,168 円となり、単年度収支でプラスとなりました。しかし、ニュースレターの作成やイベントの実施、日常的な会議などに参加するスタッフの人事費、交通費等は、各自の個人負担となっていることを考えますと、健全な運営と活動の拡大のために、さらなる努力が必要と考えています。

(2) 運営

当会の運営は、理事会及び事務局会議により行っています。

理事会 会の活動計画の決定、会則改正など重要課題への対応などを審議しました。

2010 年 1 月 9 日 3 月 13 日 計 2 回開催

事務局会議 理事会で決定した活動計画を実施するとともに、ニュースレターの内容の検討など、会の具体的な運営を

協議、決定します。

2009年5月10日 7月20日 8月22日 11月14日
2010年2月28日 計5回開催

3. 活動報告

主な活動として、ニュースレターの発行、ホームページによる情報発信、各種イベント開催を行っています。2009年度から講師派遣を開始しました。

(1) ニュースレターの発行

ホタルのニュースレター第48号、第49号を発行しました。

(2) ホームページによる情報発信

ホームページでは、当会の活動方針をはじめ、イベント案内など日本ホタルの会の情報を発信しています。

ホームページアクセス状況の推移は、次に示すとおりで、年々アクセスが増加してきましたが、2009年は、アクセス件数の伸びが鈍化しています。しかし、アクセスは着実に増えており、引き続き重要な情報発信の場として今後も積極的に活用してまいります。

ホームページアクセス数の推移

2004年度末アクセス件数	累計35,500件
2005年度末アクセス件数	累計82,500件
2006年度末アクセス件数	累計118,000件
2007年度末アクセス件数	累計204,268件
2008年度末アクセス件数	累計294,100件
2009年度末アクセス件数	累計310,600件

(3) イベント活動

観察会 2009年6月28日 八王子市創価大学キャンパス

共催：創価大学螢桜保存会

シンポジウム 2009年9月5日 第17回日本ホタルの会シンポジウム

「ホタルを呼び戻すための事例報告」

場所：新宿オーネットワー

談話会 2010年3月13日 ホタルの発光実験『ホタルの光を作つてみよう』

共催：多摩動物公園

(4) 講師派遣

日本ホタルの新しい試みとして、ホタルや環境に関する講演や地域活動のお手伝いなどを目的とする講師派遣事業を開始しました。募集は、ホームページ上で随時受け付けており、これまでに茨城県、福島県、兵庫県などから問い合わせや依頼があり、依頼者のお話を聞きつつ、調査協力等を行っています。

4. 2009年度活動について

日本ホタルの会のホタルを里山の象徴と考え、ホタルの棲む豊かな環境を取り戻すという理念を発信するため、2009

年度も、観察会及び日本ホタルの会シンポジウムを開催しました。シンポジウムは、ホタルを呼び戻すという原点に戻って、飼い方・ふやし方などの講演を行いました。また、近年、市民活動や行政の活動が中心であったホタル再生に大学が取り組むようになってきているので、大学からも報告をしていただきました。大学は、専門的な研究ができるだけでなく、若い力と継続性が期待できることから、大学と地域が連携することで、活動の幅が一層広がる可能性があり、こうしたことと今後考えていく必要があると感じています。

当会のもう一つの大きな催しである観察会は、創価大学で行われるホタルのタペに参加する形で実施しました。創価大学螢桜保存会の協力を得て、発生地と飼育施設の見学、催しへの参加などを行い、盛りだくさんの内容に参加者一同大変感激しました。創価大学のホタルのタペには地元の方が多数参加し、これも地域と大学の連携の一つと考えています。

また、昨年度実施できなかった「光の実験」を多摩動物公園との共催にて実施しました。

さらに、講師派遣を開始したところ遠方からも問い合わせ等があり、好感触を得ています。ホームページやニュースレターなどのメディアで広く発信することは大切ですが、当会の理念を伝え、環境再生を進めていくため、現場に出て直接話し、関わってゆくことも、今後必要なことと考えています。

最後に、会員数の項でも記載しましたが、昨今の経済情勢などを考慮し、公的法人会員及び法人会員の会費について、それぞれ3万円を1万円に、10万円を3万円に値下げしました。こうした努力により法人会員獲得、事業拡大に努めたいと考えています。

【書評】



大場信義 著 (2010) 「田んぼの生きものたち ホタル」, 農山漁村文化協会, 56項
定価 (本体 2500円+税), ISBN978-4-540-08234-4.

著者の大場信義先生はホタル研究の第一人者であり、これまで数多くの専門書や一般書を出版されています。本書は、農山漁村文化協会の生きもの絵本シリーズである「田んぼの生きものたち」の1つで、ヘイケボタルを中心にその生態を紹介すると共に、近年の田んぼの圃場整備や水理システムの状況からヘイケボタルが減少している原因を推察し、その保護と飼育の方法を解説しています。

本書は、23章の本編と3章の資料編からなります。本編では、ヘイケボタルを中心に幼虫の形態や餌の捕食・上陸と土繭・羽化・交尾と産卵と、一年を通した一生を豊富なカラー写真で紹介しており、ヘイケボタルの生態が、田んぼをとりまく水辺の環境にうまく適応してきたことがよく理解できます。また、近年の稻刈り前の落水時期の早まりや、合理化されたコンクリートの排水路などの圃場整備、減反政策による休耕田の放置による荒廃など、ヘイケボタルの生態に不都合な状況で数が激減していることから、ヘイケボタルの生態と田んぼをとりまく環境の変容を考慮した保護活動とその取り組みを紹介しています。資料編では、ホタルを野外で観察する上での事前準備やマナーを、そして、ホタルを復活させるための飼育方法と生息環境の再生の意味を解説しています。

ゲンジボタルに関する書物が多い中で、ヘイケボタルを例に、身近な田んぼと人の営みとのバランスを保ちながら、水辺環境を保全・再生していくことを考える書籍です。

(鈴木浩文)



イベント案内

INFORMATION

事務局からの お知らせ

【第18回 日本ホタルの会シンポジウム】

ホタルを通じて身近な自然を考える

—里山の復元についての意味を考える—

日 時 2011年3月26日 (土) 13:00~16:30

会場 工学院大学 新宿キャンパス 高層棟11階A-1111教室

スライドショー 《写真で見る里川とホタルの風景》

古河 義仁（日本ホタルの会理事）

講 演 《ホタルとの関わりを再度考える》

鈴木 浩文（日本ホタルの会副会長）

活動報告 《工学院大学ホタル研究会》

釜谷 美則（工学院大学准教授）

話題提供 《生物多様性条約第10回締約国会議について》

宇田川 弘康（日本ホタルの会理事）

ホタルのニュースレター（第52号）

2011年 2月25日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒197-0011 東京都福生市福生487 (日本ホタルの会事務局)

TEL&FAX : 042-530-2111

e-mail : inoue@nihon-hotaru.com URL : <http://www.nihon-hotaru.com>

印刷 文明堂印刷株式会社 〒239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀1-3-12

TEL : 046-841-0074 FAX : 046-841-0071